

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(国語)
／小野 由美子

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

① 教育イノベーションとしての「授業研究」の普及に関する事例研究

国際協力機構(JICA)は日本の「授業研究」の手法を多くの教育協力プロジェクトの中核に据えている。しかし、これまでのところ、「授業研究」の定着が成功した事例はほとんどない。「授業研究」を教育イノベーションととらえ、教育学研究の知見を生かして普及・定着の条件を解明することを計画している。

② 青年海外協力隊に参加した現職教員の意識変容に関する研究

外国人児童生徒が日本の学校教育に十分に適応できていない背景には、現場の教員の意識の問題もある。つまり、教師自身が文化的、言語的少数派になった経験がないことから、教師の価値観で外国人児童生徒を理解しようとしがちである。成人である教師の価値観を変えることは容易ではないが、先行研究からは異文化環境におけるジレンマの体験が意識変容を促すことが示唆されている。そこで、青年海外協力隊に参加した現職教員をターゲットに、意識変容のプロセスを明らかにしたい。そこから、教員研修の内容や方法のついでの示唆を得たい。

2. 点検・評価

①教育イノベーションとしての「授業研究」の普及に関する事例研究(基盤研究(B))においては、イノベーション理論によるイノベーションの5つの特徴と、「効果的な現職教育の基本要素」とを組み合わせる分析枠組みを開発している。本研究の成果の一端は、Springer社から出版予定(2015)の図書に執筆予定である。

②第1年度の研究のまとめを、広島大学教育開発国際研究センター(CICE)紀要に投稿する準備を進めている。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

日本語教育分野では、留学生と日本人学生とに分けられる。留学生については、学術交流協定校から交換留学生として本学で学んだ後帰国した学生への勧誘を行う。日本人学生については、地域で活動する日本語ボランティアと、日本語を母語としない子どもを担当する日本人現職教員が考えられる。パンフレットを作成し、修了生を通じて配布・勧誘する。

2. 点検・評価

日本語教育分野に社会人1名の入学があった。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

- ①学部・大学院に在籍する日本人学生に対して、多様な異文化体験を企画・実施し、多様化する公立学校の学習者に柔軟に対応できるスキル開発を支援する。
- ②国際教育研究会、茶道同好会を通して、留学生と日本人学生、外国人研修生と日本人学生との交流を企画・実施する。その際、学生自身が実施プロセスに主体的に関わるように工夫する。

2. 点検・評価

- ①日本語支援サポーター派遣支援を通して、日本の公立学校の多文化化・多言語化を実感させるよう支援した。また、インドネシア授業研究大会への日本人学生の同行、インドネシア・ハサヌディン大学日本語教育実習を通して異文化対応スキルの向上を支援した。
- ②茶道同好会を通じた異文化交流、JICA受託研修への本学学生アルバイト雇用、大学祭民族衣装ファッションショーの企画・実行を通して本学学生の異文化体験の充実に努めた。
- ③JICA受託研修員と現職教員との意見交換会、JICA受託研修員への日本語レッスンの実施などを通して、本学学生の異文化体験の充実に努めた。

II-2. 研究

1. 目標・計画

- ①途上国における「授業研究」に関する研究：特に、授業検討会でのリフレクションの内容とレベルについてルーブリックを開発する。
- ②科研「途上国における授業文化に関する研究」の成果をまとめる。
- ③ケニア研修員の日本での学びに関して、変容的学習理論の枠組みを用いて分析する。
- ④本学学生の異文化体験を、変容的学習理論の枠組みを用いて分析する。

2. 点検・評価

- ①途上国における「授業研究」に関する研究は国際学術誌に1編採択された。
- ②教育開発の分野における「授業研究」に関する図書(Springer社予定)に寄稿を依頼された。
- ③ケニア研修員の日本での学びに関しては、論文執筆の準備中。
- ④本学学生の異文化体験に関して、本学紀要に2編投稿した。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

- ①国際交流委員として、本学の国際化に貢献する。
- ②留学生コーディネーターとして、留学生の教育・学生生活の改善に貢献する。

2. 点検・評価

- ①国際交流委員として、本学職員の研修に協力した。
- ②留学生コーディネーターとして、オリエンテーション、日本語補講計画、日本の教育と文化の授業計画を策定し実施した。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

- ①アフガニスタン識字教育強化プロジェクトに専門家として参画し、現地での業務ならびに本邦での受け入れ研修を行う。
- ②ケニア研修員を受け入れ、指導技術改善の研修を行う。
- ③国際シンポジウム「Quality Assurance and Evaluation of Teacher Education Programs: International Perspectives」の実施を支援する。
- ④日米教員養成協議会年次大会を本学で実施する(7月)。
- ⑤日米学生フレンドシップ事業を企画・実施する(5月及び11月)。

2. 点検・評価

- ①アフガニスタン識字教育プロジェクトに専門家として参加し、第3国研修に同行した。
- ②アフガニスタン教師教育強化プロジェクトの専門家としてTV会議システムによる現地スタッフの指導ならびに、受入研修を計画実施した。
- ③国際シンポジウムを企画、実施した。
- ④日米教員養成協議会年次大会を本学で実施した。
- ⑤日米学生フレンドシップ事業として、5月にアメリカから学生2名、教員1名の受入を行い、本学学生とも交流した。
- ⑥ケニア国別研修の責任者としてプログラムを計画立案し、実施した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)